

まちの経済活動に 参加する

渡邊貴明

私の事務所が入居する建物は、オーナー住居と4つの貸し店舗が複合した築50年の棟割長屋である。`長屋F、と呼ぶ。

長屋Fは、往時は質屋、判子屋、時計屋、パーマ屋が居職混合で入居し、オーナー含め家族ぐるみの付き合いがあったという。いつしか彼らは他へ移り、オーナーが住むだけの専用住宅となった。市街地の国道交差点という好立地の建物でありながら、しばらく一切の経済活動を停止していたのである。

周囲を見渡すと、商店の専用住宅化は珍しくない。そこに住む人々の多くは、屋間は郊外や市外に賃労働者として出掛ける。夜になると住居に戻って食事をして寝る。職住分離である。「仕事」が抜きとられた市街地では、屋間にまちを歩く人が減る。人々が出会う機会も減る。鹿沼市街地の賑わいの希薄さは、この職住分離に一因があるようである。

長屋Fに話は戻る。2014年に私の事務所が入居する。その5年後、2019年春にオープンしたのが「MADO (マド)」である。

MADOは、地場有機野菜のランチを提供する`Matsu、フェアトレード物販&ソーシャルバーの`コブル、地場野菜を生産する`菌toko、そして私の事務所の4者で運営する、12坪の小さな複合空間である。

Matsuとコブルは一つの厨房をシェアする。平日はMatsu、週末はコブルといった具合で、曜日で店を開く主が替わる。Matsuのランチには菌tokoの野菜が使われる。店の一角には菌tokoの販売コーナーもあり、その会計をMatsuやコブルが代行する。私は空間設計と、各人とオーナーの関係調整を担当した。クライアントとの打合せに事務所を使わず、コーヒー注文を条件にMADOの客席を利用することもある。弁当箱持参でランチを詰めてもらうのも日々の楽しみだ。高齢で食事の用意に苦慮するオーナーも、Matsuのランチを楽しみにしているようである。

長屋Fに経済活動を取り戻す。さらに、郊外や市外など遠い場所ではなく、近い相手と経済の交換関係をつくる。それが、MADOのめざすところである。それは近い未来、自立した地域社会の一助になるはずである。



建築設計室わたなべ 代表

1985年栃木県鹿沼市生まれ。関東学院大学人間環境学部人間環境デザイン学科(現、共生デザイン学科)卒業、宇都宮大学大学院工学研究科修士。一級建築士。関東学院大学非常勤講師。LOCAL REPUBLIC AWARD 2018最優秀賞を共同受賞